



名古屋

近代の都市づくり



— 三大都市への道 —



池田 誠一

【2】明治維新〈元年からの10年〉…試行錯誤の末

1 維新の変化

明治維新は、名古屋の街にどのような影響を与えたのでしょうか。

「明治維新」の解釈は様々ですが、突き詰めれば、明治元年を境にした日本という国の政治・経済・文化のシステムの変転です。それは大きく見れば、政治面では幕藩体制から近代国家へ。経済面では年貢制から地租制に。文化面では仏教から神道へと動いたということでしょうか。都市づくりという視点から見れば、やはり幕藩体制という地方分権型から

府県制による中央集権型への変化が気になります。

今回は、明治になってから10年。このように大きく変わった社会や街が、名古屋ではどのようなものだったかをみてみたいと思います(図1)。

2 明治の世

(1) 社会の変化

明治維新は、政権の変化だけではありませんでした。まず、長い日本独自の社会から、

西欧流の社会への変化が起こったのです。明治の最初の10年の日本は、その激変が社会を襲いました。

たとえば「暦」です。太陰暦から太陽暦に変更になりました。「時間」も変わりました。これまでの日出・日没を基準にした不定時法から、1日24時間を等分する定時法へと。貨幣制度も、身分制度も、生活の根幹となる様々なことが、ガラッと変わったのです。



図1 鯨のない名古屋城天守閣(名古屋市博物館蔵)

そしてこのような変化の中で、名古屋の街にも、早々と西欧文化の影響を受けたものが登場し始めました。

「郵便」「学校」「新聞」「病院」「銀行」…。また、4年には早くも大須で「博覧会」が開催されています。

一方、「租税」の改正は大きな問題になりました。米による物納から、地価に基づく貨幣納へと。この地租改正は、その合理性を求めて大きな社会問題になり、この付近でも一揆がおこるような事態になりました。また、「軍事」の制度でも、国の軍が配置されるとともに、国民皆兵で徴兵制が施行されました。これらは国民に大きな負担になりました。

明治維新の10年は、このような変化が日本の社会に一気に押し寄せてきた時代だったといえます。

(2)「名古屋区」の誕生

いろいろな大変革があった時代。都市という視点から見ると重要なのは行政の区域です。これは何度も試行錯誤が繰り返されました。

まず、明治2年の「版籍奉還」です。藩から政府への移管。そして代表者も藩主から知事になりました。尾張藩はとりあえず名古屋藩になりました。区域はそのままです。

次の大きな変換は、4年の「廃藩置県」です。藩という名称はなくなり、「県」とされました。名古屋藩は名古屋県になりました。この頃、県知事は県令と改称されています。その後、江戸時代の支配関係の残る地域の再編や統合が行われます。300余の藩が2割近くに減りました。この付近では、名古屋県は犬山県等を吸収しました。5年、愛知県と命名され、6年には三河の額田県と合併して今日の愛知県ができたのです。

同時に県域の中を整理する必要もありました。合併した藩や代官の管轄区域の整理も必要でした。県の下には「区」という単位が用いられ、大区、小区と2段階制なども試みられましたが、9年、愛知県は区に一本化され、県内は9区に分けられました。名古屋と熱田は共に第1区です。

ところが、11年11月。今度は「郡区町村編成法」が施行されました。これは従来の郡や町・村を行政区域に生かすとともに、都市部と農村部を分け、原則として、都市部は「区一町」に。農村部は「郡一村」に分けるものです。この結果、愛知県は1区16郡となり、名古屋市街は「名古屋区」に、熱田は「愛知郡」に入りました。名古屋区の初代区長は元尾張藩士の吉田禄在で、区役所は当面南外堀町の松井邸に置かれました。ここに、10年の変遷を経て、ようやく「名古屋」を冠した、今日の名古屋市の基となるような行政区域が生まれることになったのです。

(3)街の変化

明治維新の街を考える上で、もっとも大きなテーマは「お城」だったといえます。それまでは、お城は街の中心でした。それが、いきなり不要なものに変わったのです。お城も武家屋敷も消え去る運命になりました。

明治2年。尾張藩の藩議で早々と城の取り壊しの意見が出て、翌年正式に決定されました。4年には鯨は天守から降ろされ、東京宮内省に返却されました。そして勸業博覧会に展示され、続いて6年には、ウイーンで開かれた万国博に出品されています。本丸は、5年にはドイツ公使のフォンブラントが、10年には陸軍の中村大佐が、その存続を訴えたため取壊しを免れました。存続が決まると鯨



二の丸の東門。陸軍歩兵第六連隊の入口だった



二の丸庭園には歩兵第六連隊の兵舎が並んでいた

この入口は、江戸時代には馬出しの堀が囲っていました。しかし、明治天皇の馬車が曲がれないとかで西側の堀が埋められ、今は広場になっています。正門を入り枳形を抜けるとすぐ本丸御殿です。天守閣と御殿は戦災まで残っていました。見上げる天守の上の鯨は明治の初め、4年から11年まで、なかったのです。



本丸を守る「馬出し」の西側の堀は、離宮化で埋められて広場になった



明治初に建設された「乃木倉庫」。
軍使用に支障するものが保管されたと考えられる

天守閣の前を通り、不明門を抜けると深井丸です。左に進んで右手の道を清洲櫓の方に進むと左側に白い建物があります。乃木倉庫で、戦災を免れた、明治の残る唯一の建物です。この倉庫によって本丸御殿の襖絵は戦災を免れたのです。

少し戻り南に進むと、鵜の首を通過して正門前の広場に出ます。正門は名古屋城が離宮になった時、江戸城の榎田門が移されました。



名古屋城本丸は明治26年、名古屋離宮となった。
昭和5年廃止され、下賜された記念碑

〈正門を出て〉

正門を出ると右側に大きな石碑があります。昭和5年末、離宮から一般に下賜されたことを記念したものです。

堀に沿って東に進み、突き当たって右に行くと交差点に出ます。その右手に赤レンガの堀が残ります。この奥には陸軍の第三師団の



第三師団司令部の区域。
赤レンガの塀が残っている

司令部(初期は名古屋鎮台)がありました。

交差点を南に進みます。この南北の通りは大名小路と呼ばれ、左右には大名格の家老、成瀬家や竹腰家等の上屋敷がありました。これらのお屋敷は、明治の初めには県や区の役所に利用されましたが、陸軍所管になって城外に移されています。進むと、両側に本町御門の石垣があります。名古屋城の大手門でしたが、明治6年に撤去されました。



この少し西にあった通りが大名小路。
西に成瀬家、東に竹腰家の上屋敷があった

外堀を渡り、外堀通を左に曲がります。江戸時代、碁盤割地区の北端だったこの通りだけは藩の施設や武家屋敷が並んでいました。このため、明治になってから様々な施設に利用されています。名古屋区も、最初はこの通り沿いに事務所が置かれています。

しばらく行くと大津橋です。昭和の初め、



大津橋。外堀の土塁を壊して道路がつくられた騎兵隊の縮小に伴い、城郭内に市役所が建設され、そのために土塁を壊して道路が出来ました。北に進むと、重要文化財になった県庁と市役所の庁舎が並びます。付近には地下鉄の入口があります。

4 金鯢の返却

明治4年、鯢が無くなった名古屋城は名古屋の人間にとって寂しいものでした。11年6月、世論の高まりの中で、伊藤次郎左衛門、関戸守彦、岡谷惣助が有志総代となって宮内庁に鯢の返還を願出しました。区長の吉田禄在はもちろん、県令安場保和の尽力もあり、9月、宮内庁から「聞届候」との通知がありました。そして11年末には、金の鯢は再び天守に輝くことになったのです。

名古屋区という行政区画ができる前に、名古屋人は官と民が協力して、名古屋のシンボルを取り戻すことに成功しました。まさに、近代名古屋がスタートする記念すべき事件になったのです。

〈主な参考文献〉

- ①服部鉦太郎『写真図説 明治の名古屋』
(1968、泰文堂)
- ②同編集委員会『新修 名古屋市史 5巻』
(2000、名古屋市)
- ③瀬口哲夫他『なごや四百年 時代検定 公式テキスト』
(2007、名古屋商工会議所)